京都大学	博士(文学)	氏名	高　田　英　樹
論文題目	マルコ・ポーロ研究		

（論文内容の要旨）

総頁数1,883という大部のものであり、下記の4巻から成る。

Ⅰ　マルコ・ポーロ／ルスティケッロ・ダ・ピーサ「世界の記」－F・Z・R－訳

Ⅱ　マルコ・ポーロの書の研究

Ⅲ　マルコ・ポーロ論

Ⅳ　中世東西交流史論

論考としての出発点はⅣにあり、ここでまずマルコ・ポーロ研究開始の前提として、西洋人の世界像と東方観の形成が理論・神話・現実の三層に分けて検証される。理論としてはダンテ『神曲』、神話として「プレスビテル・ヨハーンネスの書簡」、現実としてカルピニ『東方旅行記』、またこれらの総合としてボッカッチョ『デカメロン』が考察の対象となる。

中世ヨーロッパ文化の総合と言われる『神曲』においては、キリスト教地中海世界が地球の中心に位置し、インドに代表される東方は文明世界の東の果てであり、そこに住むのは福音による救済を待つ人々に過ぎない。後々まで継承されていくキリスト教ヨーロッパ中心の世界観がすでに揺るぎなく形成されている。「プレスビテル・ヨハーンネスの書簡」には聖書や古典古代の神話、そして中世のアレクサンデル物語等に至るまでの東方のイメージが流入しているものの、そうした神秘と幻想に満ちた東方を統治するのはキリスト教司祭王に他ならない。これはやがて近代帝国主義によって実現することになるキリスト教西洋による異教アジア支配の夢である。西方人として初めてユーラシア大陸を横断したフランチェスコ会士カルピニが接触し、その『東方旅行記』に描写されたアジアの現実は、何よりもまず「野蛮」であり、これもまたヨーロッパ「文明」に対するアジア的「野蛮」というレッテルの具体的証明として近代にまで変わることのない東方のイメージを決定づける。東西の往来が盛んになった14世紀の『デカメロン』においては、東方がもはや驚異のまなざしをもって眺められることはないものの、自分たちとは異なるものとして愚弄や滑稽化の対象となり、この流れも変わることなく受け継がれていく。

その他、偽カリステネス『マケドニア王アレクサンデル伝』（翻訳）、「ゴグ・マゴグとモンゴル」、ハイトン『東方史の華』（翻訳）、『オドリーコ・ダ・ポルデノーネの東方』（翻訳）をはじめとするⅣに収められた他の研究も、このような西方における東方観のあり方を検証するためのものである。

Ⅲの内容は、マルコ・ポーロ研究の基礎となる、背景としてのヴェネツィア史と伝記、それに過去の研究史および写本の系譜に関する論考と翻訳である。

近代のマルコ・ポーロ研究は、ラムージョ『航海・旅行記』(1559) 所収のイタリア語集成訳テキスト (R) に付された序文に始まる。そこで、まず3種の序文を翻訳するとともに、そのテキストと伝記に関わる諸問題を、ラムージョの誤りを含めて検証することをもって論者は本研究の出発点としている。マルコ・ポーロのテキストの本格的研究は19世紀初頭のF写本の発見およびそのエディション、いわゆるフランス地理学協会本の刊行 (1824) とともに始まる。ポーチェによるグレゴワール版 (FG) の出版(1865)と、ユールによるその英訳および浩瀚な註の刊行(1871)、トスカナ語版(TA)やヴェネト語版 (VA) の再発見と刊行があり、やがて20世紀に入ると、ベネデットによるゼラダ手稿のコピーの発見(1927)、デーヴィット・パーシヴァルによるトレドでの同原本 (Z) の発見 (1932) とムールによるその出版 (1935) によって新たな展望が開かれる。中でもベネデットは、新たに校訂したF写本に、ZとR他の主要写本との異同、およびFには欠けている記事を注に補いつつこれを出版し、さらに当時知られていた150余の写本のすべてを厳密に対校して全体の系譜を明らかにすることにより、以後の研究全般の基礎を築くことに成功した。ここにはベネデットの『マルコ・ポーロ写本』の序文に当たる「写本の伝統」が全訳されている。

ベネデットは、Fが1298年にジェノヴァで作られたとされるオリジナルかそれにごく近いテキストであり、FにはなくR (Z) 他に見出される記事は後代の加筆であるとする従来の定説を批判し、失われた真のオリジナルにはすべての記事が含まれていたものの筆写・翻訳の過程であちこちが削除・省略された結果が現在の状態であるとする仮説を掲げた。論者はこうしたテキストにまつわる数多くの問題を、その論争史に沿って整理したうえで、ルスティケッロの人物像に関する研究史についても、出身地とされるピサの歴史にまで掘り下げて詳細を調査している。

Ⅰの巻は主要3テキストの対照訳である。ただし、単に外国語から日本語に内容を翻訳したものではなく原テキストにまで遡って詳細に比較検討されており、一種の校訂版としての機能を併せ持つ。

マルコ・ポーロ写本はその言語と内容によって次の7つの系統に分けられる。1. フランス語地理学協会版 (F) 2. フランス語グレゴワール版 (FG) 3. トスカナ語版 (TA) 4. ヴェネト語版 (VA) 5. ラテン語ピピヌス版 (P) 6. ラテン語ゼラダ盤 (Z) 7. イタリア語ラムージョ版 (R) である。内容の面からこの7つは二つのグループにまとめることが可能で、1. から5. までがF系、6. と7. がZ系を形成し、後者は前者にはない記事を大量に含んでいる。

Fはイタリア語がかった独特の北仏語で書かれており、ルスティケッロ作とされる騎

士物語『メリアドゥース』と文体が共通するところから、言語的にはオリジナルに最も近いと推測される。FGはこれに近い別の写本から標準的な北仏語に訳されたもの(1307)であり、TAは同じ写本のトスカナ語訳(1309以前)、VAはヴェネト語訳(1314以前)、またPはVAのラテン訳(c.1314-21)である。これらは内容の面でFと一致する部分が多く、大きな異同はないものの漸進的な省略・要約を跡付けることが可能である。これに対してZは、Fと共通する部分に関してはよく一致するが、ほぼ常にFよりも詳細かつ正確であることから、これよりもさらにオリジナルに近いテキストから訳されたものである可能性が高い。また、F系のテキストには見られない独自の記事を200以上も含んでおり、これらの記事はほぼいずれも史実に忠実で、しかも興味深いものが多い。Rは、ラムージョがPを底本にZの兄弟写本キジ家稿本(Z^1)ほか複数のテキストから採り入れた記事を加えて編んだ集成イタリア語訳であり、Zの独自記事を一部共有するほか、Zにもない多くの記事を含んでおり、これらは現存しないZ^1に由来するものと推測される。

以上の概説から分かるように、マルコ・ポーロのテキストの系譜の追求はZおよびRの独自記事がどこに由来するのかという問題と密接に関わっている。つまり、それらが失われたオリジナル・テキストに当初から含まれていたのか、それともZの加筆なのか、という問題である。この問題の解決を図るためにはF・Z・Rという3種のテキストを厳密に比較検討する以外に現在のところ方法はない。これまでにも個々のテキストを独立に刊行した例は枚挙のいとまがないほどであり、二つ以上の情報を持たせた刊本もある。それらは、ポーチェのFGにRの独自記事を補ったユールの英訳(1871)、自ら校訂したFにZ・Rほかの主要写本の独自記事を注の形で補ったベネデットのもの(1928)、FとTAをそれぞれ独立の巻に収めたロンキ版(1982)であり、また新たな集成本としては上記のベネデット版を基になされたオリジナル復元の試みであるベネデットのイタリア語版(1932)と、Fを底本として他の主要な17写本の異同をすべて組み入れ、欄外に出典を明示したムールの英訳版(1938)が挙げられる。

現存写本中、最も重要なF・Z・Rの3テキストを章ごとに対照させつつ全訳したⅠは、次に述べる論考Ⅱにとって必要不可欠なベースを提供すると同時に、少なくともわが国における今後のマルコ・ポーロ研究全般の礎石となるであろう訳業である。

Ⅳに提示された問題意識に沿って、まずⅢにおいて背景となる事実関係やこれまでの研究史が検証され、続いてⅠにより研究のベースが整備されたことになる。そしてⅡにおいてはマルコ・ポーロ問題の数々を解く試みがなされる。具体的には、①マルコ・ポーロという人物の存在、②26年にわたったとされる東方旅行の実態、③教皇の使節という役割、④旅行中の商い、⑤17年に及ぶとされる中国滞在、⑥グラン・カンの家臣としての身分、⑦使者として各地に派遣されたとされるその任務、⑧3年間の揚州統治、⑨インドへの使節行、⑩ほとんど姿の見えない家族、⑪コカチン姫を送りな

がらの帰路、⑫ジェノヴァへの捕囚、⑬ルスティケッロとの出会い、⑭問題の書の編纂、⑮そのための備忘録・ノートの存在、⑯ルスティケッロとの役割分担、⑰作品成立の年代と場所、⑱オリジナル・テキストについて、⑲目撃した事実と伝聞の分別、⑳情報源と種本について、㉑テキスト伝承と加筆の有無、㉒編訳者について、㉓ F と Z・R の間の内容上の相違、である。これらはマルコ・ポーロに関する根本問題でありながら未解決となっており、要となるのは写本の系統、および記された内容と史実との関係である。論考においては上記 23 の問題が取り扱われるが、Ｉが特に有効に機能するのは⑭以降のテキスト問題に関してであり、実際に最大の成果が挙がったのもこの分野である。

写本の系統について現在の定説となっているのは基本的にベネディクトの唱えたものであり、彼によるとすべての出発点は 1298 年にジェノヴァで作られたオリジナル写本であり、内容の上でもこれが最も充実していたが、それがコピーあるいは翻訳される過程で部分的に削除・省略を被り、結果として残されたのが現存の各テキストである、ということになる。F にはなく Z・R にのみ見られる独自記事もオリジナル写本に存在していた、とする仮説である。しかし、Ｉに基く詳細な検討の結果、そうした独自記事は大きく 3 つのタイプに分けられることが明らかになった。すなわち、(1) 文中での散らばり型、(2) 続けて補足する補い型、(3) 完全に独立した纏まり型、である。このうち (1) に関しては確かにベネデット仮説に基いて説明するのが妥当であるものの、(3) の多くは、同じ章の中でも内容の上で他の部分から孤立しており、一般により詳細かつ正確であり、また叙述の様式においてもルスティケッロのそれと大きく異なることから、別の人間による加筆である可能性の高いことが判明した。なお、(2) はいずれの性格をも有しており、個々の判断によらざるを得ない。

加筆がマルコ・ポーロの備忘録等に基くのか別の人間によるのかは判定し難いが、いずれにせよベネデット説が十分な説得力を持たないことは明白であり、独自記事の中にはわずかであれ 1298 年以後の事件に関する記述も見られることから、すべてを備えたオリジナル写本が存在したと考えるのも無理である。Z の訳者がマルコ・ポーロの備忘録を含めた他の史料によってヴェネツィアで加筆を行なった可能性も排除できない。また、R、Z ともに　F との共通記事においても翻訳と呼べるほどの相似は認められず、実質的にはそれぞれの言語による書き直しである。

結局、《マルコ・ポーロの書》とは、彼の備忘録その他の資料を基にルスティケッロが書いたものを核として、その後多くの手により様々な言語で織りなされた多数の書物の総体を指すものと考えるべきであり、従ってマルコ・ポーロという人物もまた、ルスティケッロはじめそうした書物の作者たちを代表する象徴的存在と見なすのが適切であるというのが本論考の最終的な結論である。

（論文審査の結果の要旨）

『東方見聞録』とマルコ・ポーロの名は知らない者のないほど有名であるが、その一方、それら書物や人物の実体については厚い謎のベールに包まれてきた。いくつもの根本的な問題が内包されていたからである。

まずテキストであるが、それはマルコ・ポーロなる人物の手になるものではない。彼は、その程度はともかくとして、東方の複数の言語を話すことができたと思われるものの作品を執筆する能力はなく、母語は13世紀のヴェネツィア語であった。しかし、この言語が文章語として使用されることはなく、「マルコ・ポーロの書」の最古の写本とされるパリの国立図書館所蔵のfr.1116（通称F写本）は訛りの強い独特の北仏語で記されており、その筆記者は物語作者ルスティケッロ・ダ・ピサであったとされる。ただし、この写本が明るみに出るのは近代になってからであり、筆記者の同定はさらに新しいうえに、ルスティケッロなる人物もまたどのような人物であったのかははっきりせず、彼とマルコの関係についても詳細は不明である。しかし、『東方見聞録』自体は言うまでもなくF写本発見のはるか以前にフランス語やイタリア語、ラテン語などにより広く知られていたわけで、しかもそれら数多くのテキスト間には言語・文体のみならず内容についても大きな相違があり、作品伝承についてはほとんど不明のままであった。

テキストの伝承をめぐる問題と切り離すことのできないのが、そもそもこの「書」がどのようなジャンルの作品として存在していたのかという問題である。すなわち、マルコの書が近代的な意味における旅行記あるいは記録として眺められるようになるのはヒューマニズムを待ってのことであって、16世紀に入るまでの約2世紀間、この書はむしろ文学の一ジャンルである《驚異の書》として読まれていた。そもそもルスティケッロという筆記者が同定されるのも、彼の筆になる騎士物語『メリアドゥース』の同時代の写本fr.1463と冒頭の序文が酷似していたからであり、このことはマルコの書が誕生の時点から既に地理的情報や史実の記録としてではなく文学としての性格を色濃く有していたことを意味する。この問題は歴史研究と文学研究の両分野にまたがる本論考のあり方にまで及んでおり、審査委員のメンバー構成もまたこうした事情を反映するものとならざるを得なかった。

そして、いま一つの大きな問題は、マルコの書に記された彼自身の東方における体験を直接に裏付ける史料が、東洋史の側において一切見出されないという事実である。このことからマルコ・ポーロの東方旅行そのものを疑うべきであるという主張が生まれる。極端な主張ではあるが、彼がフビライ・カンから公式に委ねられた任務を帯びて中国各地を訪れたとする叙述に関して史料が皆無であるという事実は、確かにマルコの書の記録としての信憑性に大きな疑問を投げかけずにはいない。

本論文は、Ⅰマルコ・ポーロ／ルスティケッロ・ダ・ピーサ「世界の記」－F・Z・R－訳、Ⅱマルコ・ポーロの書の研究、Ⅲマルコ・ポーロ論、Ⅳ中世東西交流史論と

いう４巻から構成され、こうした根本的な未解決問題を数多く抱えるマルコ・ポーロ研究の現状の打開に正面から取り組んだものとして高く評価できる。

特筆されるのは、主要テキスト間の異同を可能な限り詳細かつ的確に把握することが先決であるとする明確な認識に基いて、多大な時間と労力を費やしＦ・Ｚ・Ｒという主要３テキストの対校および全訳を完遂し、Ｉに収めたことである。和訳に当たっては既刊の校訂版を無条件に信頼することなく、原写本あるいは16世紀の初版本の検証を行なっている。あくまでも翻訳ではあるが、このような念の入ったチェックが行なわれていれば専門的研究のベースとして十分な精度を持つ。対象を文学作品として扱う場合には一般に言語・文体上のカラレーションが問題になるため、校訂作業を翻訳に反映させるのは困難であるが、本論考の場合、問題になるのはあくまでも記述内容であり、そもそも３テキストはＦが北仏語、Ｚがラテン語、Ｒがイタリア語という具合に使用言語からして異なる。従って、こうした形で代表的な３テキストを容易に比較対照することが可能になったことは画期的である。翻訳そのものの精度は極めて高く、前述のとおり原テキストのチェックも入念であることから、詳細な注を含めて今後のマルコ・ポーロの研究にとって基本的文献のひとつとなることは疑いない。

本研究の重要部分も多くはこの対照訳に基いて行なわれており、とりわけⅡに収められた多数の説得力に富むテキスト分析と解釈は、これなくして可能であったとは考えられない。高田が総括として提示する『東方見聞録』の真の姿とは、マルコ以前に恐らくは彼の父や叔父を含むヴェネツィア商人によって蓄積されていた東方関係の情報に始まり、ルスティケッロをはじめとする中世の物語作者や、これとは異なる意識の下に作業を行なった16世紀のラムージォなどの編纂者たちによる活動の総体であり、彼によればマルコ・ポーロもまたひとりの人間と言うよりもひとつの象徴として立ち現れる。こうした結論が納得されるのも、個々の記事に関してテキストを具体的に追跡した成果に負うところが大きい。

文学研究においては、作品の姿を唯一のオリジナル・テキストに求める、かつて当然の前提とされた考え方はすでに過去のものとなり、近年は少なからぬ異同を含む複数のテキストや、場合によっては複雑を極める作品伝承の総体そのものを作品の存在と捉える考え方が主流となっている。本論考は純粋な文学研究とは言い難いが、その結論とするところはこうした流れに沿うものであり、それはまた『東方見聞録』という対象の本質を的確に捉えたものであるとも考えられる。歴史を専門とする委員からは、『東方見聞録』をマルコ・ポーロなる人物の実体験に基くものであるとする、客観的な根拠を欠く命題が疑問の余地なく研究の前提とされている点が指摘されたが、これも文学研究と歴史研究の両分野にまたがる作品を扱いつつ、この両分野にまたがる関心をもって追求した結果の表れと見ることができ、論文の価値を下げる要因ではないと解釈される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるも

のと認められる。平成23年12月8日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した口頭試問を行なった結果、合格と認めた。